2021年12月6日付　朝日新聞

ベトナム戦争参戦 韓国軍の虐殺問題考える

記録映画、中野で10日まで

ベトナム戦争に参戦した韓国軍による民間人虐殺の問題を追ったドキュメンタリー映画「記憶の戦争」（1時間19分）が「ポレポレ東中野」（中野区東中野）で公開中だ。11月20日には韓国人のイギル・ボラ監督（31）が上映後、観客に「歴史的な過ちをどう記憶したらいいか、問いかける映画です」と語った。

韓国の朴正熙（パクチョンヒ）政権は1964年～73年、ベトナム戦争に兵士延べ30万人以上を派遣し米国を支援。戦争特需で韓国は経済発展を遂げた。韓国軍がベトナムで非武装の民間人を虐殺したと99年以降に韓国内で報道されたが、政府は否定。退役軍人らは反発し、報道機関や和解活動を行う市民団体に抗議してきた。

イギル監督の祖父はベトナム参戦を誇った軍人だが、多くを語らず亡くなった。虐殺の問題を知り衝撃を受けた監督は、2016年～18年にベトナムで取材。家族を韓国軍に虐殺されたという女性らの証言を聞き、映画にまとめた。

映画で証言したグエン・ティ・タンさんは20年、韓国政府に損害賠償を求めソウル中央地裁に提訴。11月には元韓国軍兵士が「民間人の死体を見た。隊員が（殺害について）話していた」と法廷で証言した。

イギル監督は「韓国の若者は虐殺を知ると『韓国は侵略された被害者だと学校で教わったが、加害者でもあったとは知らなかった』と衝撃を受ける。過ちを繰り返さないためにも、映画が過去を考えるきっかけになってほしい」と話した。

ポレポレ東中野での公開は12月10日まで。

（編集委員・北野隆一）

イギル・ボラ監督

「週刊金曜日」2021年10月15日発売号

映画

ベトナム戦争下、韓国軍による民衆虐殺を直視

木村元彦
きむら　ゆきひこ／ジャーナリスト

©2018 Whale Film

『記憶の戦争』

「慰安婦」問題を語るとき、「ベトナム戦争で韓国軍だって同様のことをしていた」という相対化の言説が一部で流通している。愚かである。それで日本の戦争犯罪が免罪されるわけがない。「ジャングルでは虎部隊（韓国軍）は米軍よりも怖かった」というのは通説になっている。韓国にはこの戦争特需に乗って経済発展を成し遂げようという「大義」があった。しかし、「大義」はいつも「正義」ではない。イギル・ボラ監督は、祖父が虎部隊の将校で「自分が進学できたのもその稼ぎがあったから」ということを知っていた。学んだ歴史教科書も外貨をベトナム派兵で稼いだことを誇らしげに記述し続けていた。そんな個人史の中で韓国軍によるベトナム民衆虐殺の事実を知れば、自らがカメラを持って現地に行かざるをえなかったという。

映画には声高なアジテーションはない。撮影も編集も極めて繊細に施され、監督がコーダ（ろう者を親に持つ健聴者）であればこそ出逢えた、ろう者による証言や、虐殺跡地を痛切に切り取る映像美には猛烈に心が揺さぶられた。「ボラ監督は被害者証言のインタビューを決して搾取の形で行なわなかった」というソジン撮影監督の弁に納得した。完成に感謝したい作品に久々に出逢った。日本との差をますます感じさせられる。

監督：イギル・ボラ
撮影：クァク・ソジン
2018年／韓国／79分

●11月より、東京・ポレポレ東中野にて公開。ほか全国順次公開。
※新型コロナウイルスの感染拡大により、公開延期・休止になる場合があります。

2021年11月5日付　ふぇみん

映画『記憶の戦争』のイギル・ボラ監督に聞く
加害の記憶・歴史をどのように見つめ直すのか

ベトナム戦争に米国側で参戦した韓国軍の民間人虐殺の記憶を描いたドキュメンタリー映画『記憶の戦争』の上映が始まる。どのような思いで製作したのか。イギル・ボラ監督（『きらめく拍手の音』、本紙2017年6月15日号1面）に聞いた。

©2018 Whale Film
11月6日より、東京・ポレポレ東中野にて公開。以後、全国順次公開。
配給　スモモ　https://www.sumomo-inc.com/kiokunosensou

自国の加害の歴史に向き合う映画を、韓国の観客はどう受け止めたのだろうか。

「20代の若者は学校でも教えられないので、ショックを口にする人が多かったです。善良な被害者ではなかったのか、と。一方、自分たちは加害者でも殺人者でもないと主張する参戦軍人もいますし、進歩派は、こうした過ちを繰り返さないために謝罪すべきだと言っています。つまり、この件に関して韓国社会ではまだ合意が形成されていないのが現状です」

イギル・ボラ監督
©Space nura

そこで「両国で異なる記憶をどう見せるかと悩み、参戦軍人の記憶も入れようと思ったのです。彼らは映画祭にも軍服で押しかけ、こんな映画を上映するのは恥だと大騒ぎしました」。

被害側の証言者はベトナム中部のフォンニィ・フォンニャット村に住む3人。

「市民運動から紹介を受けたり、私の両親がろう者であることを知っている方が『生存者にろう者がいるが、会ってみませんか』と言ってくださったり。そうした方たちを訪ね、最初の1～2年はほとんど撮影はせず、祭祀などに参列して関係を築いていきました」

被害者にカメラを向ける。それも加害国の人間が行うのは容易ではなかったはずだ。

「祖父もベトナム戦争に参戦し、勲章や賞状を家に飾っていました。それを誇らしく思っているのは子どもに罪悪感がありました。カメラを持つ者としてどう倫理的な関係を築けるのか。正解はないと思いますが、私たちは十分な時間をかけて相手との関係を作り、全員が撮影を理解してくださったときに撮影を始めることにしたのです」

製作スタッフが全員女性であるのは、最初から意図したわけではないという。

「ただ、戦争で真っ先に犠牲になるのは女性、障害者、子どもといった弱者です。ですから戦争や虐殺を男性以外の視線で見るために、作る側にも非男性の視点が必要だと考え、結果的に女性だけになりました」

東京で開かれた「女性国際戦犯法廷」をモデルにした「ベトナム市民平和法廷」（2018年）も登場する。日本のように、政治家による作品への改ざん圧力はなかったのだろうか。

「企画・制作時は朴槿恵政権だったので製作支援は受けられず、上映も不可能になるかと心配でした。米国によるベトナム戦争に全面協力した朴正熙大統領の娘でもありますから。幸い、文在寅政権に代わり、虐殺の事実を認めない従来の政府方針は変わっていないものの、認めないから圧力をかけるといったことはありませんでした」

似ているかに見える日韓の歴史修正主義の風景の、大いなる違いをそこに見る。

●中村富美子

2021年11月5日付　東洋経済日報

ベトナム戦争時、韓国軍の民間人虐殺描く
イギル・ボラ監督ドキュメンタリー映画『記憶の戦争』

ベトナム戦争時の韓国軍によるベトナム民間人虐殺の真相に迫ったイギル・ボラ監督のドキュメンタリー映画『記憶の戦争』が6日、東京・ポレポレ東中野ほか全国順次公開される。門間貴志・明治学院大学文学部芸術学科教授に、同映画について寄稿してもらった。

©2018 Whale Film
家族を殺されたベトナム人生存者たちが、当時の状況について証言するドキュメンタリー映画『記憶の戦争』

過去の被害と加害の問題を問いかける

寄稿　門間　貴志（明治学院大学文学部芸術学科教授）

かつて金秋子が歌った「ベトナム帰りの金軍曹」という軽快な流行歌があった。ベトナムに派兵された金軍曹が手柄を立てて無事に帰還したことを喜び祝うという内容である。歌詞は、帰りを待ちわびた母の喜び、また近所の人々の笑顔を描写する。しかし韓国現代史におけるベトナム戦争の意味を考えると、のんきに歌える歌ではなくなったように思う。

米国の同盟国として、韓国は1964年9月から1973年3月の間、32万5000名の兵士をベトナムに送り出した。それによって韓国は米国の経済援助を得て、それを高度経済成長の足がかりの一つとした。まだ貧しかった韓国は外国に輸出する有力な製品を持たず、ベトナムに軍人を、ドイツに炭鉱夫や看護婦を、労働力を送り出したのだった。

イギル・ボラ監督の『記憶の戦争』は、ベトナム戦争での韓国軍が行ったとされる民間人虐殺行為についてのドキュメンタリーである。ソンミ村事件のように米軍によるものではない。韓国軍によるものである。

これまで韓国の劇映画では、ベトナム参戦の描写は控えめなものだった。帰還兵は武勇を語ることはなく、むしろその後の人生に暗い影を落とすというのが一つのパターンだった。大ヒットした金鎬善監督の『英子の全盛時代』（1975）でも男性主人公は徴兵されて中国に送られる。映画ではベトナムでの体験は語られないが、当時の韓国人男性の体験としてはよくあることのように描かれる。

裵昶浩監督の『その年の冬は暖かだった』（1984）では、傷痍軍人となったヒロインの夫が、出征前とは別人のような暗い性格に変わってしまっている。初めてには韓国軍が虐殺に関与したという描写はない。

しかし、これらの映画では、ベトナム参戦の描写は不可分なものである。

ドキュメンタリーとなれば、劇映画のようにノスタルジーに浸るわけにはいかない。日本も同じような体験をしている。私の親族にも大戦中に徴兵されて中国に渡った人がいる。私の知る彼は温厚なおじいさんだったが、戦争中のことは家族にも一切語らなかったという。語れない体験が山ほどあったのだろう。ベトナムで民間人の虐殺に関わった韓国の軍人は、全体からすれば一部だったのかも知れない。それでも民間人が犠牲になったことを全く知らなかったわけではないはずである。ベトナムでの体験は素直に語れるものではなかっただろう。『記憶の戦争』は、まさしくその負の面をとらえている。

イギル・ボラ監督は、韓国の若手ドキュメンタリー監督である。韓国国立芸術大学で学んだ彼女は、耳の聴こえない父母との日常を、娘の目線からとらえた『きらめく拍手の音』（2015）でデビュー。山形国際ドキュメンタリー映画祭では「アジア千波万波」部門の特別賞を受賞した。その彼女が二作目にこのテーマを選んだのは実に興味深いことである。

タンおばさんをはじめ、虐殺にあった村の生存者たちからの証言を引き出し、そしてソウルで開かれた市民平和法廷という名の模擬法廷などが紹介される。その一方で、韓国の退役軍人の不満も紹介される。「参戦勇士」と称された韓国軍人たちは、自分たちは国家の命令で出征し、「良民を殺していない」と主張するが、これまで韓国は過去の被害を主張してきたが、自身の加害の問題はどうなのか、この若い監督は問いかけている。

ベトナム戦争をテーマにしたのは鄭智泳監督の『ホワイト・バッジ』（1992）であろう。白馬師団に参加した元軍曹が戦争のトラウマに苦しむさまが描かれる。以後も、郭在容監督の『ラブストーリー』（2003）ではヒロインの初恋の男性が、ベトナムで失明して戻り、林燦尚監督の『大統領の理髪師』（2004）では、主人公が雇っている理髪師が戦地で片手を失い、尹濟均監督の『国際市場で会いましょう』（2014）では、主人公がビジネスで赴いたベトナムで戦闘に巻き込まれ、九死に一生を得る。韓国の現代史とベトナム戦争は不可分なのである。

「ベトナム戦争と韓国、そして1968」（コ・ギョンテ著、平井一臣、姜信一、木村貴、山田良介訳、人文書院、四六判、374ページ、3600円＋税）

著者はハンギョレ新聞記者。ベトナム戦争に派兵された韓国軍の民間人虐殺事件に焦点を当て、事件の実相と背景について多角的分析を試みた。被害者やその遺族からの証言に耳を傾けるとともに、韓国軍人も調査し、戦争における被害・加害の両面を丹念に追いかけている。

2021年11月14日付　東京新聞

ベトナム戦争の虐殺追う映画を撮影　イギル・ボラさん(31)

この人

ろう者の両親の姿を追ったドキュメンタリー映画で注目を浴び、今度はベトナム戦争での韓国兵による民間人虐殺を扱う映画「記憶の戦争」を制作し、日本でも公開した。「ろう者の両親のもとに生まれたことが、語り手として最大の贈り物」と原点を語る。

ソウル郊外出身。音声言語より先に手話を覚え、物心つく頃には両親と他者の橋渡し役だったという。手でにぎやかに話す両親を追った「きらめく拍手の音」は国内外で高評価を得た。

次に撮ると決めていたのがベトナム戦争だ。学校では戦争特需と国の発展を習う。「負けた戦争を、戦争で稼いだお金をなぜ誇るの」。学び続け、虐殺の歴史を知った。

誰かが戦争を誇る裏で、地獄のような経験をした人々が存在する。「聞こえてこなかった声を残す」と、生き延びたベトナム人女性にカメラを向け、言葉に耳を傾けた。

徴兵制がある韓国で「女に何が分かる」との言葉を聞いたが、作品を世に出すことで「『私』の話が『私たち』の話になる。そうして社会が変わっていく」と信じる。日本人の夫と暮らす福岡とソウルを往来する。（井上陽南子）

2021.11.14

2022年7月8日付　朝日新聞

自国に都合悪い歴史 伝える

リレーおぴにおん

痛みはどこから 8

韓国は1964年から73年にかけてベトナム戦争に軍隊を派遣しました。当時は軍出身の朴正熙（パクチョンヒ）大統領の独裁体制下で、同じ反共政権の南ベトナム政府を米国とともに支援したのでした。

韓国が民主化され、報道や研究が自由になると、ベトナムで韓国軍が老人や女性、子供らを虐殺していたことが明らかになりました。しかし韓国政府は賠償や謝罪はおろか、いまだにきちんとした調査もしていません。

私は現地で被害に遭った人たちの証言を集め、この問題に取り組む韓国の市民たちを取材し、2018年に「記憶の戦争」という映画をつくりました。昨年から東京や大阪、福岡などでも上映されています。

映画では、被害を受けた人たちが、体と心の痛みを口々に語っています。私は、取材をしながら加害の国の人間だという負い目が常にありました。ベトナム人が私をにらんでいるように見え、私の心も痛みました。

実は、祖父がベトナムで戦ったのです。自らも枯れ葉剤を浴び、何度も手術をした末にがんで亡くなりました。戦争については語りませんでしたが、家には勲章が飾られていました。兵士は加害者でもありますが、国家が始めた戦争に動員され、十分な補償もなく亡くなった被害者でもあるのです。

民主主義の世の中になると、戦争の「英雄」たちが市民社会から犯罪者と指弾されるようになりました。元軍人たちは、「この映画は大うそだ。虐殺なんてなかった」と抗議しましたが、それは彼らの心の痛みの叫びだったと思います。

私は学校で「日本人は韓国を植民地にした悪い奴ら。韓国は他国を侵略したことはない」と教育されました。ベトナム戦争は韓国の経済成長に寄与したと教えられ、非武装の民間人を虐殺したことなど知りませんでした。自国に都合が悪いことは、事実であってもきちんと教えない。それは日本の歴史教育も全く同じです。

ウクライナでまた悲惨な戦争が起きています。歴史をきちんと伝えたい。学校教育だけでなく映画もその助けになります。戦争の歴史を記憶しなければ、人類は同じ痛みをまた経験することになるのです。（聞き手・桜井泉）

ドキュメンタリー映画監督　イギル・ボラさん

1990年韓国生まれ。ろう者である自らの両親と家族の日常を描いたドキュメンタリー映画「きらめく拍手の音」も日本で公開された。

2021年11月2日付　しんぶん赤旗

（第３種郵便物認可）

ベトナム参戦を問う

ドキュメンタリー映画「記憶の戦争」

Yoon Songyi 撮影

韓国 イギル・ボラ監督

加害・被害 向き合う人々

韓国のイギル・ボラ監督の「記憶の戦争」。ベトナム戦争中の1968年、ベトナム中部での、韓国軍兵士による虐殺事件「フォンニィ・フォンニャットの虐殺」の被害者を取材したドキュメンタリー映画です。監督は、「加害、被害によらない、戦争の記憶と向き合う人々を見せたかった」と語ります。

ベトナム戦争中の韓国兵による蛮行は、韓国の報道で1999年に明らかになりました。64年から9年間、延べ30万人以上を派兵した韓国。フォンニィ村の虐殺事件では、69～79人の民間人が犠牲になったとみなされています。

取材では、現地に暮らす生存者に話を聞き、村に侵入した韓国兵から銃撃され家族を失った恐怖や悲しみなど、彼らの記憶をもとに被害の実態を明らかにしていきます。

監督は、韓国兵の蛮行の受け止め方が世代間で異なると言います。

６日から、東京・ポレポレ東中野で公開、順次全国で

© 2018 Whale Film

「私自身は、ベトナム戦争体験者からみると第三世代になります。韓国の教科書は、旧日本軍に占領された被害は書いていても自国の加害の歴史には触れていない。韓国は日本に向けて謝罪を求めるように、ベトナムに謝罪をすべきです」

韓国政府からベトナム政府に対する謝罪がないことに、悲しみと怒りをにじませるベトナム人女性。一方で、加害側の心情を描くことにも苦心しました。

元参戦軍人による上映阻止の集会も開かれました。

「印象的だったのは、本作を見てトラウマから混乱をきたす人がいたこと。ある意味、元参戦軍人も被害者ではないでしょうか。個人的に謝罪を言い出すことが難しい彼らに、本作は過去を語るはけ口となったようです」

16日に予定されている市民法廷では、元参戦軍人が証言台に立ちます。

日本には、ベトナム戦争の軍需物資で経済が支えられた歴史があり、直接的な派兵がなかったとはいえ、関連がないとは言い切れない、と話します。

「本作を見て、日本に向けて被害を訴える韓国が、ベトナム戦争では加害者だったなんて、と言われるかもしれません」

「当事国以外の国や人が何らかの形で関わっているのが戦争だという事にも目を向けてほしい。戦争は、二度と繰り返してはならないと思います」

（鎌田有希）

2022年4月2日付　毎日新聞（西部版）

土曜カルチャー

非男性の視点と戦争

イギル・ボラ監督が新作

福岡市在住の韓国人映画監督、イギル・ボラの新作ドキュメンタリー「記憶の戦争」の上映会が3月、福岡市早良区の九州大西新プラザで開かれた。ベトナム戦争での韓国軍の民間人虐殺事件を被害者ら個々の記憶から問う意欲作で、スタッフ全員が女性。「男性の視点から語られてきた戦争を〈非男性〉の視点からどのように記憶することができるかがこの映画のテーマ」とイギル監督。上映後にはトークイベントがあり、製作の背景などを語った。

映画が主題に据えるのは、ベトナム戦争での韓国軍の民間人虐殺事件。約80カ所で9000人近くが虐殺されたとされるが、詳細は不明なままだ。1999年に韓国人ジャーナリストが告発し、以後、韓国国内では虐殺事件の真相を解明し、国家の責任を問う市民運動が続けられてきた。2018年には、韓国政府の責任を問う市民平和法廷が開かれ、虐殺で家族を殺され、生き延びたグエン・ティ・タンさんが訪韓し、証言した。映画はその場面から始まる。

映画製作の経緯や背景について語るイギル監督（左）＝福岡市早良区の九州大西新プラザで

90年生まれのイギル監督は「ベトナム戦争は自由を求めた戦いであり、韓国に経済成長をもたらした」と教えられてきた。祖父（故人）は参戦軍人の一人で、祖父はそれを誇りにしていた。その戦争で韓国軍が起こした残虐な事件を知り、衝撃を受けた。「どうして同じ事件が異なる記憶となるのか。実際に現地に行って、自分の目で確かめなければいけないと思った」。現地に何度も足を運び、封切りまで5年かけ製作した。

映画は、タンさんのほか、虐殺を目撃したろうあ者のディン・コムさん、虐殺で家族を失い、韓国軍の地雷で盲目となったグエン・ラップさんらの証言でつづられる。さらに市民運動や、告発に反発してデモをする参戦軍人らの姿も映し出される。「それぞれが戦争をどう記憶しているかを描いた」とイギル監督。映画は事実の究明というよりも、虐殺事件によって被害者らが受けた傷と、それを抱えて今まで生きてきた人生を浮かび上がらせる。

市民法廷では、虐殺を戦争犯罪と認め、韓国政府の責任を問う判決が出るが、タンさんらが求めたのは、事件に関わった参戦軍人からの謝罪だった。一方、盲目のラップさんは製作陣に「誰も罪は償えない」と言う。タンさんの証言を聞いた韓国の中学生たちは「これからは事件について、私たちがたくさん知らせる努力をします」と誓う。それぞれの記憶が交差し、観客に問いかける。

イギル監督は、国家が管理する公的歴史に対し、個々の人間が持つ私的な歴史の重要性を説く。この映画の製作を通して、言語化しにくい記憶、記録しにくい一人一人の記憶の大切さに気づいた」と言う。だからこそ「私たちは私たちの道を進むべきだ。政府が何であれ、公的な歴史がどうであれ、私たちは私たちの歴史を絶えず作っていくべきであり、それが大切だ」と呼びかけた。

上映会開催の問い合わせは、配給のスモモ（03・6450・5867）へ。【上村里花、写真も】